

「キカイデミルコト -日本のビデオアートの先駆者たち-」記録映画の書店販売 -高度成長時代の映像アートを辿る知的アーカイヴ・過剰情報時代に「みること」を問い直す-

概要:1965年にSONYをはじめとしたメーカーがポータブル(持ち運びができる)ビデオカメラが市販化させ、誰もが映像を撮影し、見ることができる時代に突入しました。その新技術に着目したアーティストたちは、それまでのアートの領域を超え、映画やテレビとは違った自由な表現を展開します。当ドキュメンタリーは彼らの証言と、作品の一部を見せながら高度成長時代を担った映像のアートを、技術と芸術の関係、市民運動とメディアの観点、またビデオカメラの「VIDEO」がラテン語の「私は見る」という言葉に由来していることを軸に紹介します。Youtube やニコニコ動画で誰でも映像発信ができる現代にこそ、「見ること」の意義を問いかける内容となっていると思われます。

販売元:現代企画室、**発売日:**2013年10月、全国書店・美術館などで販売予定



1972年銀座ソニービルでのビデオアート展
生まれてはじめてTVに映った自分を見る観客



裸の男女が映されるビデオ作品、当時女性のモードはアート作品でしか見られなかった(作中から)

詳細:

●「キカイデミルコト」というタイトルは聴き慣れない言葉ですが、テクノロジーの「機械装置を通して見る」とふと瞬間に撮影することができ偶然に見る「機会で見ると」いうことが掛け言葉になっております。

●監督を務めた瀧健太郎は、自身もアーティストであり、海外研修(文化庁、ポーラ美術財団)を経て、日本文化は伝統芸能だけではなく、電子立国として産業面での勃興とともに、アート表現でもけっして同時代の欧米に引けを取らない様々な試みがあったことを知り、当ドキュメンタリーを制作しました。

●本作は国内だけでなく、アメリカ、ドイツ、韓国での取材を行いました。N.Y.近代美術館 MOMA の特集をはじめ、にわかに戦後の日本の美術への世界の関心が高まっております。これまで紹介されて来なかった1960年代半ば頃の映像のアートの動向が、約半世紀を越えて蘇る内容となっております。

●本作は単に新しい技術を使い捨ててきた、日本がもう一度何が行われてきたかを振り返り、次世代への一つの指針を与えるアーカイヴという視点が中心に据えられております。

●本作はアートのドキュメンタリーとしては珍しくブルーレイ化され、書店での販売を考えております。同じ複製芸術であるところの、写真が写真集として書店で売られていることを考えると映像作品もますます書店での購入が進むと考えられます。

また2011年からはじまった地上デジタル化によってハイビジョン放送は進むものの、その記録媒体としてのブルーレイの市場はまだ広く認知されたとは言えません。しかし再生機のみであれば4~5千円での購入も可能となりました。このキカイ(機会)にブルーレイのキカイ(機械)への買い替えもお勧めしたいと考えております。

取材・掲載のお問い合わせ先

NPO 特定非営利活動法人ビデオアートセンター東京 代表：瀧健太郎(たきけんたろう) TEL 080-4355-1721
E-mail taki.kentarou@ebony.plala.or.jp 作品詳細は <http://kikai-de-mirukoto.vctokyo.org/>